

## 第 37 回日本保健医療行動科学会学術大会 大会長挨拶

馬込武志 (東大阪大学)

この度、2023 年 6 月 17 日(土)~18 日(日)、第 37 回日本保健医療行動科学会学術大会を開催させていただき運びとなりました。開催に際し、多くのみなさまのご支援とご協力に心から感謝申し上げます。コロナ対策も行いながら対面での開催といたします。(感染状況によっては、Web 開催の可能性もあります)

本学術大会では、「未来志向の保健医療」をメインタイトルとしました。第 36 回大会での「ダイアログの姿勢の実践」を受けて、その実践において見定めるべきは「未来」ではないのかと。



以前、テレビで衝撃的なシーンを見ました。医師と患者が話し合っているシーンです。医師が若干、声を荒げながら、「それ以上飲んだら、死にますよ」と言っている。すりガラスの向こうにいる患者であろう人も負けてはいません。「私がお酒を辞めたら、会社がつぶれますっ」患者は会社の社長でした。その後の話を要約すると、接待で酒宴を催さなければならない。そこで飲まないといった“無粋”なことはできない。そういう主旨の患者側からの反論でした。

生きるということが一番大切で、「死んではいけない」と思い込んでいた私には、医師が繰り返した「死にますよ」という最後通牒をもろともせず、猛反論されました患者が衝撃的だったのです。

苦しい時、つらい時、この苦しみやつらさが、未来永劫続く、あるいは、もう未来などなく苦しい、つらい今があるだけという感覚に陥ったことはないですか。時間は流れ、時代は変化します。自分を取り巻く環境も変わります。人も移ろいます。

苦しい時、つらい時には、この時間の(流れていくという)感覚が失われているのではないのでしょうか。病を得たときも同じなのかもしれません。つまり、今よりも先の未来へ意識を向けてみるのが求められていると思います。

前述の医師と患者の会話も「今」の視点でのみ話し合っているように思えます。お互いに意識を未来に向けたときどうなるのでしょうか。私の考えは大会長講演で。

「未来」についてともに語り合いましょう。語り合うことで、元気や勇気が得られるような大会にしたいと思います。皆様のご参加を心からお待ち申し上げます。